

主 題：教会のあるべき姿 : 成長⑨
聖書箇所：エペソ人への手紙 4章15節

テーマ：聖書の教える教会のあるべき姿とは？

今朝、皆さんと続けて見ていきたいみことばはエペソ人への手紙4：15です。聖書をお持ちの方はどうぞお開きください。

約2カ月にわたって考えてきたこの“教会のあるべき姿”というシリーズ、その最後のまとめ部分について先週から14－16節を通して学び始めています。ここまでの流れをいま一度思い返してみてください。教会を正しく建て上げていくことができるようにと、キリストが私たちに与えてくださった取扱説明書。その説明書を開いてみると、そこには教会を建て上げていくのに必要な材料や道具の使い方、また最終的な完成形の姿までもが記されていました。キリストはまず私たちひとりひとりに恵みによって霊的賜物を与え、その上でそんな私たちが奉仕の働きにふさわしい、整えられた者となっていくために、みことばを教える霊的リーダーをも備えてくださいました。そして、それぞれが組み合わせられて与えられた働きを忠実になして行く時に、キリストのからだである教会は成長し、完成形の姿へと近づいていくのでした。成長した教会には一致や信仰の成熟、そしてキリストの姿が見られるようになるのです。これが主が持つておられた教会の完成図、私たちみなが目指して行くべき究極的な目標でした。

○目標を目指して成長する教会：その過程における五つの注意点

そしてこの目標を目指している私たちがどうすればそこに到達することができるのか、そのために私たちが具体的に今何をすべきなのか——。それが14－16節を通して考え始めた内容でした。何度も言っているのもまたかと思うかもしれませんが、大切なことなのでもう一度言います。私たちが何かを作ろうとする時には、必要な材料がそろっていることも、完成形の姿を正しく把握していることも非常に大切なことですが、同時に注意すべき点を押さえて正しい手順に沿わなければ目的の物は完成しません。同じように教会を建て上げる時も、主の設計図に則って押さえるべきポイントに気をつけて建て上げていく必要があります。では、その押さえるべきポイントとは一体何なのか——。注意する点とは一体何なのか——。ゴールを目指している私たちは一体何をすべきなのか——。少なくとも五つのことをこの箇所から見ることも皆さんにお伝えし、今回はそのうちの最初の一つを一緒に見ました。

1. いつまでも子どものように惑わされないこと 14節

それは私たちがいつまでも子どものように惑わされないということでした。パウロは救われた者はみな例外なく霊的な赤ちゃんとして、その信仰生活をスタートすると教えていました。でもそのままの状態、未熟なままではいなくて成長していきなさいと教えていました。いつまでも子どものままだまい続けることがどうして問題になるのかというと、それは未熟な子どもというのが「波にもてあそばれ」てしまう不安定な存在であり、また「教えの風に吹き回され」てしまうようなだまされやすい存在だからです。霊的に未熟なままではいことは大きな危険を伴い、すぐに感情や状況、罪の誘惑に揺り動かされてしまったり、さまざまな間違った教えに惑わされて正しい真理の道から迷い出てしまうことがあったりします。また特にすべての悪、偽りの背後にいる狡猾なサタンは綿密に計画を立てて、そんな人々をだまそう、混乱させようといつも働いているのです。私たちの周りは私たちをみことばやキリストの福音から遠ざけようとする危険であふれ返っているのです。だからこそ目標を目指している私たちは、いつまでも子どものままだまいではいなくて、成長して大人になっていくことが必要だとパウロは教えていたのです。間違った教えに容易に惑わされない者になっていくこと、それが私たちに与えられていた一つ目の注意点でした。

2. 愛のうちに真理を堅く保って成長すること 15節

きょうはこれに続けて二つ目の注意点を15節の中から見ていきたいと思えます。

エペソ4：14－16

「14 それは、私たちがもはや、子どもではなくて、人の悪巧みや、人を欺く悪賢い策略により、教えの風に吹き回されたり、波にもてあそばれたりすることがなく、15 むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、かしらなるキリストに達することができるためなのです。16 キリストによって、

からだ全体は、一つ一つの部分はその力量にふさわしく働く力により、また、備えられたあらゆる結び目によって、しっかりと組み合わされ、結び合わされ、成長して、愛のうちに建てられるのです。」

さて、目標を目指して教会が成長して行く上で注意すべき二つ目の点は、愛のうちに真理を堅く保って成長することです。15節は「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、」と始まっていました。子どものままでいてはいけないと14節で教えたパウロは、それに対比してここでははっきり言うのです。兄弟たち、私たちはいつまでも生まれたばかりの幼子——不安定でだまされやすい未熟な者でいるのではなく、「むしろ、愛をもって真理を語り」成長して霊的な大人を目指していきなさいと。

ここで詳しい内容を見て行く前に、少し考えてほしいことがあります。それは一体だれがこの責任を負っているのかということです。「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長」していく必要がだれにあるのかということです。それは14節の最初に見たように「私たち」です。「私たちがもはや、子どもではなく……むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し」、キリストに似た者へと変わっていくのです。つまり何度も繰り返し私たちが見たことすし、エペソ4章の中でも教えられてきたことですが、パウロを含めたすべてのクリスチャンが例外なく「あらゆる点において成長」していかなければならないということです。「愛をもって真理を語」るのは、教会のリーダーや限られた少人数の人にのみ与えられた責任ではなく、私たちひとりひとりがなしていくべき責任だということです。

こうして私たちは、みなキリストに似た者になっていきたい、キリストに似た者へと変えられていくことを日々願いながら、みことばに継続的に従って生きていこうとするのです。それがクリスチャンの歩みなのです。私たちはいつもキリストに似た者へと変わっていきたく、個人的にキリストを知った者、主のすばらしさを知った者はそういった願いを持って、そういった目標を目指して今を生きているのです。愛する主をもっと知りたい、キリストに似た者へと変えられていきたくといった熱意を持って私も、また皆さんもきょう歩んでおられるはずで、私たちの模範であるパウロもまさにそのような生き方をしていました。そのことがピリピ3：12-14に記されています。「私は、すでに得たのでもなく、すでに完全にされているのでもありません。ただ捕らえようとして、追求しているのです。そして、それを得るようとキリスト・イエスが私を捕らえてくださったのです。兄弟たちよ。私は、自分はずでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」、パウロも一心に目標を目指して生きていました。

ここで私たちが覚えておくべきことは、このピリピのことばをパウロが口にしたのは彼が救われて間もない時ではなかったということです。彼は自分が救われて間もない時に、まだ何もわかっていないような幼子の時に、自分はまだ完全な者ではありません、まだまだ成長していく部分がたくさんありますと言ったのではなかったのです。このピリピ人への手紙はパウロが救われてから約20年後に記されました。約20年の間、彼は主のために生き、さまざまな場所に出て行って主の福音を熱心に宣べ伝え、信仰ゆえに数多くの試練や迫害に直面したのです。またそれだけではありませんでした。その20年の間に、彼は使徒としてガラテヤやコリントといった手紙だけでなく、あれほど神学と知恵にあふれたあのローマ人への手紙さえ記していたのです。明らかに言えることは、パウロはほかのクリスチャンと比べてもキリストのことを深く知っていたし、この方のことを深く愛していました。そんなパウロですら、自分が完全な者であるといっさい考えていなかったということです。彼は自分がまだまだゴールからかけ離れた位置にいる存在だということを正しく理解していました。だからこそ彼はどんな時も愛するキリストに似た者になっていくことだけをただ一心に求めて、その目標を目指して生きていたのです。

だとすれば、私たちが考えるべきことは、私たちがそのような熱意を今持って生きているのかということです。私たちは今パウロと同じ目標を目指して生かされています。そんな私たちはこのパウロが持っていたような同じ熱意を持って、同じ願いを持って成長していくことをただひたすらに追い求めているのでしょうか？心からキリストに似た者になっていくことを願って、ひたむきに前のものに向かって今を生きているのでしょうか？私たちのうちにある、主に似た者に変わっていきたくという願いは、ますます強められているものなのでしょうか？それとももう達成してしまったかのように、もう何かを知って満足したかのように、あたかも成長が終わってしまったかのようにふるまっているのでしょうか？パウロは救われて20年たった今も私の願いはたった一つ、キリストに似た者になっていくことだけを求めているのだ、そうして生きていました。私たちもみな例外なく、この同じ目標を目指して今を生きています。私たちの歩みはどうでしょう？パウロは自分自身がキリストに似た者になっていくことを熱心に求めて

いたからこそ、私たちはもはや子どものままでいるのではなくて、あらゆる点においてキリストに似た者として成長していかなければいけないと、ほかの兄弟たちにはっきりとすることができました。

こうして成熟を目指していくことを求めていたパウロ。でも彼はただ漠然とここで成長しなさいとは言っていませんでした。彼は「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、」と言ったのです。つまりやみくもに成長を目指していくのではなく、「愛をもって真理を語」ることを通して成長していくことが私たちにとって大切なのだと言っています。もっと言えば、これこそが今私たちひとりひとりがまさに具体的になしていくべきことだと教えています。

では、この「愛をもって真理を語」というのが一体どういうことかについて、少し時間を取ってよく考えてみましょう。

a. 「真理を語り……」

まず「真理を語」とここで訳されていることばですけれども、パウロは非常に不思議なことばを用いています。というよりも、日本語では直接表現できないことばを彼は用いるのです。それは「真理」ということばの動詞形です。「真理」ということばを動詞にできますか？無理ですよ？そんなことばは日本語にはありません。でももしパウロがここで言わんとしたことを直訳しようとするのであれば、彼はここで「私たちは真理することによって成長するのだ」と言っていました。

◎「真理する」

ではこの「真理する」というのは一体何でしょう？多くの註解書に書かれていることをまとめると、このことばに対して大きく二つの意味を考えることができます。

①真理を話す

一つ目はここで訳されているとおり、「真理する」というのは「真理を語る」とか「真理を話す」ということです。パウロがここで用いていたこの「真理する」ということばは新約聖書の中であと1回、ガラテヤ4：16に出てきます。そこでは「それでは、私は、あなたがたに真理を語ったために、あなたがたの敵になったのでしょうか。」とあります。この箇所を見ても、「真理する」ということばが口で話すことと結びつけられていることから「真理する」を「真理を語る」であったり、「真理について述べる」といった意味で取ります。私たちは真理を語っていくことを通して成長して行くと。

②真理に根ざして歩む

二つ目の意味として考えられるのは、真理をただ語る以上のこと、「真理を実際に行うこと」、もっと言えば「真理を堅く保つ」とか「真理に根ざして歩む」と取る考え方です。つまり「真理する」というのは単に真理について話すことではなくて、真理を知ってそれを理解し、その真理を実践して行くこと、真理を堅く保つことによって成長して行くことだとするのです。多くの註解書やたくさんの牧師先生たちがこの二つ目の意味の方がここでは適切ではないかと考えています。そして私自身もそのように思います。

なぜ「真理をする」というのが「真理を堅く保つ」という意味で取ることができるかという、これまでの文脈を振り返ってみると、パウロはここでいろいろな偽りの教えに惑わされてしまう、そんな子どもでいるのではなくて、成長して大人になっていくことを求めていました。そこでちょっと考えてみてください。いろいろなものに揺り動かされることがない、そんな成長した大人になっていくのに必要なのが、ただ真理を口にするだけだと思いませんか？それともいろいろな偽りの教えに揺るがされることがないように真理を堅く保ってその真理に根ざして生きていくことだと思いませんか？恐らく後者ですよ？ですから確かにここでは「真理を語り」と訳されていますが、パウロがここで言わんとしたことをまとめるとすれば、ただ単に真理を語る以上のこと、「真理を堅く保つ」ことによって私たちは成長していくということだったのです。もちろん誤解のないように言いますが、当然「真理を語」ることが間違っているのでも、私たちにとって必要ないわけでもありません。むしろ私たち互いの間で「真理を語」ることは欠かせない大切なことになるのです。でも私たちがこの文脈だけを見て、このことばを考えるのであれば、私たちが成長して行くために必要なのはただ口で言うだけではなくて、実際に真理を生きていく必要があるということです。

◎霊的な大人

ここで私たちが覚えておかなければいけないことは、霊的な大人というのは、たくさんの知識をただ知っているだけの者ではないということです。大人というのは自分の持っている知識をただ口にするだけの者でもありません。成熟した者というのは、自分が語っていることと実際の行動とがかけ離れているような偽善的なものでは絶対にありません。日曜日だけは賛美をささげ、主に仕えるクリスチャンとしてふるまって、あとの1週間は主を知らない人と全く同じような歩みをする人物は霊的な大人では絶

対にないのです。霊的に成熟した大人はいつも真理する人物です。言いかえると、その人物は霊的リーダーたちから真理を学んで、学んだ真理を心に蓄えて、心を惑わす大きな波や嵐が襲って来たとしてもその真理をいつも強く握って揺るがされることがなく生きていこうとする者だということです。真理をいつも強く握って放さない。そしてその生き方がどんな時も真理に根ざしているからこそ、その人が語ることも振る舞うことも、その人のうちにある真理を人々の前に明らかにしていこうとするのです。単にことばだけではなくて真理を生きている人物です。

◎真理

ここまで聞いて皆さんは恐らくこう思うのではないかと思います。先ほどから真理、真理と繰り返しているけれども、ではその真理とは実際に一体何なのですかと。私たちはいつも何を強く保って成長して行くべきなのですかと。そのことに対する答えをイエス様はこのように教えてくれました。ヨハネ 17 : 17 で「真理によって彼らを聖め別ってください。あなたのみことばは真理です。」と。イエス様はみことばが真理なのだと述べていました。つまり私たちはこの聖書、このみことばの中に記されている教えを強く保っていくことによって、これに根ざしていくことによって成長していくのだということです。

ここで皆さんが誤解しないように少し立ち止まって考えたいのは、私たちが究極的に成長させてくださるのは神様です。パウロも I コリント 3 : 6-7 で「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」と言っていました。パウロはまだ霊的に未熟だったコリントの兄弟たちがどのリーダーにつくのかといったことで争っている時に彼らに語るのです。あなた方はアポロにつくとか、パウロにつくとか、そういったことで分裂して争っていますが、大切なのはどんな人に目を向けるかでもなく、どんな人が何をしたかでもなく、神様に目を向けることです。なぜならすべてを計画し、成長をもたらされたのは神様だからと。これと同じように、神様が働いてくださることなしには私たちも成長していくことはありません。私たちが霊的成長を目指していくのであれば、私たちは神様に抛り頼む必要があるのです。成長の源はいつも神様です。私たちが成長させる力を持った神様は、自分が望まれることならどんなことでも成し遂げることができる全知全能の力強い方であるからこそ、私たちのうちに直接働いてその信仰を成長させようと願われるのであれば、それはもちろん可能です。しかし、神様はご自分が直接働いて成長させるのではなく、別の手段を用いて私たちが成長できるようにして下さったのです。

その手段こそが真理のみことばになります。私たちがこの真理のみことばだけではなく、この真理を強く保つのであれば、ここに根ざしていくのであれば、私たちのうちに神様が成長を生み出してくださるのです。だからこそ私たちはいつも成長の源である神様に抛り頼むこと、祈っていくことが当然大切なことになり、同時に信仰の成長にとって必要な聖書の真理を学んでいくことが欠かせないのです。これは強調しても強調し足りないほど重要なことですが、その重要性について聖書は何度も何度も繰り返し教えています。ペテロも I ペテロ 2 : 2 で「生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。それによって成長し、救いを得るためです。」と言っていました。また先週私たちが見た箇所ですけれども、使徒 20 章でエペソの長老たちに対して、パウロは自分が出発した後、教会に凶暴な狼たちがやって来て群れを荒らし回るようになること、また群れの中からも人々を惑わすような者が出てくることを警告していました。その後、パウロは使徒 20 : 31-32 で「ですから、目をさましていなさい。私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。」と言います。パウロは危険が迫っていることをよくわかっていました。だからこそ彼らがみことばに根ざして生きていくことを求めたのです。みことばによって彼らが成長していくためでした。

こうしてみことばを見る時に確実に言えることは、私たちの信仰の成長にとってみことばの教えというものは欠かすことができないものだということです。霊的に未熟な子どもが成長して、大人になっていくのに必要なものはすべて、このみことばの中に与えられているということです。だとしたら問題は、私たちがこのみことばの真理を自分の成長に欠かせない、そんな栄養分だと考えて、今も変わらずに学び続けようとしているかどうかです。私たちはキリストに似た者になりたいという強い願いを持っていることも当然大切ですが、その願いをかなえるために、そうやって成長していくために、そのエネルギーとなるみことばを学んでいかなければいけないのです。ランナーがゴールを目指してメダルを取りに行きたいとどれだけ強く願ったとしても、そのランナーが訓練をしなければ、もっ

とえばランナーのエネルギーとなるご飯を全然食べなかったとしたら、メダルが取れないばかりか走ることもできなくなるのです。私たちも同じで、私たちが成長していくことを強く願って生きていこうとするのであれば、同じぐらいこのみことばに根ざして、みことばを学ぶことを求めていかなければいけません。

皆さん、先週の歩みを振り返ってみてください。どれほどみことばと向き合って、その教えによって成長したいと願って1日1日を過ごされたでしょうか？忘れてはいけないのは、私たちの敵であるサタンは、私たちひとりひとりを惑わして真理から離れさせよう、罪を犯させようと、今もまさにさまざまな策略を練っているということです。私たちがキリスト以外のものに目を向けて、間違っただ道に迷い出ると、ありとあらゆる誘惑を用いてその機会を虎視眈々とねらっているのです。私たちの周りにはそんな危険がたくさんあふれています。そういったものに気をつけていなさいと、みことばも何度も繰り返し言っていました。もし私たちの周りには危険がたくさんあることを知っているだけではなくて本当に信じているのであれば、そしてその危険から自分の身を守るためにはこのみことばが絶対に欠かすことができないことを知っているのであれば、みことばと日々どのように向き合っていくのかは、私たちひとりひとりでよく考えなければいけないこととなります。私たちを成長させてくださるのは神様です。神様は、みことばの真理を用いて私たちのうちに働かれ、成長をもたらしてくださいます。だからこそ私たちの責任は、この真理を学んでただ知識として蓄えるのではなく、実際にそれに従い、真理を堅く保って生きていくことです。

b. 「愛をもって……」

a) 真理を堅く保つことと愛を実践すること

私たちが「真理する」ことによって、神様はますます私たちを成熟した者へと変えていってくださいます。そんな「真理する」者として私たちは日々歩んでいるのでしょうか？また、パウロは私たちの成長にとって真理が絶対に欠かすことができないと教えてくれていたのですが、それだけではありませんでした。パウロは単に「真理を語り、あらゆる点において成長し」とは言わなかったのです。彼は「愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し」と言ったのです。つまり私たちはみことばの真理を堅く保って成長していくのですが、そこには必ず神様に対する愛と人々に対する愛がなくてはならないということです。私たちは愛のうちに真理を堅く保つことによって成長していくのです。言いかえれば、真理を行うことと愛を示すということはどちらも絶対に欠かすことができないものだということです。これは私たちにとってとても大切なことです。なぜなら私たちは真理と愛、どちらかに偏った者として成長していくべきではないからです。私たちは真理に傾いて生きて行くのではなく、愛にだけ傾いて行くのではなく、「愛をもって真理を語」ることによって「成長」していくのです。自分自身の心を吟味してみてください。あなたの歩みは今、真理に偏っているもののでしょうか？それとも愛に偏っているもののでしょうか？それともそのどちらもがはっきりと見られる歩みでしょうか？どちらかに偏っている歩みというものはいけません。

では、どうして私たちがどちらかに偏った者として成長して行くべきではないのでしょうか？それはどちらかに偏った歩みをしてしまえば、必ずそこに問題が生じるようになるからです。例えばある人がいつもみことばに堅く立って、人々にその真理を語る者であったとします。その人物はいつもみことばに照らし合わせて正しいことをしようとするのです。それ自体はとても素晴らしいことです。でも、もしその人物のうちに愛がなかったとすれば、その人物はほかの人のうちに、聖書に沿っていない間違いや誤りを見つければ、すぐにその人のところに行って、あなたがやっていることは間違っていますよと、その人に寄り添うことなく非難して過ちを矯正して正そうとします。その結果、どれだけ正しいことを行い、正しいことを語っていたとしても、愛がなければそのふるまいは相手に徳を与えるものではなく、相手の益になるものでもなく、相手を傷つけることにつながってしまいます。どれだけみことばに沿って真理を実践していたとしても、そこに愛がなければ、それは相手の益とはならない、無価値なものだということです。まさにそのことをパウロはIコリント13：1-3で「たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。」と教えていました。だからこそ愛がいっさいない、ただ真理を実践するような者たちだけが集まってしまえば、その教会は律法主義的な冷たいものになってしまいます。

でもこれとは逆で、愛だけに焦点を置いて真理をないがしろにするようなことがあってもいけないのです。ある人がいつも真理をないがしろにして、とにかく愛を示さなければならないと行動したとします。その人物はキリストの精神を実践しなければいけないと言って、どんなものに対しても寛容をもって優しくし、たとえ間違いがあったとしても、争いたくないからそれには触れず、どんな人やどんな意見もとりあえず容認して、徹底的に人との争いを避けようとするのであればどうなると思います？だれかの罪を指摘するようなこと、だれかの罪を正すようなことは愛ではないと考えて、罪を見て見ぬふりをし始めたら、その教会はどうなっていくと思います？そんな教会には確かに一見たくさんのおいしい人たちが集まっているかもしれませんが、でもその内側を見てみれば、いろいろな間違っただけの教会がはびこり、いつまでたっても罪がそのままそこに残り残されてしまうのです。清さを求めて行くべき私たちが、教会がいつまでたっても罪が拭い去られることのない教会になってしまうのです。真理を妥協して、人々の感情にのみ寄り添うような教会は聖書的な教会では絶対にありません。聖書が教えている愛というのは、間違っていることをそのままよしとするものではなく、真理を喜びとするものになることです。そしてもし私たちがキリストに従い、みことばの真理を伝えるということ以上に、人を喜ばせることや人の歓心を買うことだけに焦点を置いているのであれば、それは大きな問題だということです。

パウロはガラテヤの人たちにこのように言っていました。「いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。いや。神に、でしょう。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまお人の歓心を買おうとするのなら、私はキリストのしもべとは言えません。」とガラテヤ1：10で言っていました。私たちが成長していこうと願うのであれば、真理を堅く保つこともまた愛を実践することもどちらも欠かせないのです。そして残念なことに多くの教会が間違っただけの考えを持って、キリストの精神を発揮しなければいけないと間違っただけの考えであっても、罪であってもそれらを無視するのです。争いを引き起こしたくないから、だれかの罪を指摘したくないからと言って、真理をないがしろにすることが多々あるのです。でも、それは聖書的な教会ではないと聖書は言っています。私たちに真理を堅く保つことも、また愛を実践することもどちらも必要です。ジョン・ストットという神学者はこのように言っています。「私たちの愛は真理によって強められなければ弱々しいものになってしまう。また、私たちの真理は愛によって和らげられなければ堅くなってしまいます。」と。私たちは愛をもって互いに真理を実践し合っていく必要があるのです。そして、それは時に相手の間違いや罪を愛をもって指摘してあげるといってもそうです。

b) 愛をもって真理を語るということ

相手の間違いや罪を指摘するという点において皆さんはどんなふうに進んでいます？難しさを感じてしまったりしますよね？関係が壊れてしまうことや拒絶されることを恐れて、間違いを指摘することができなかつたり、自分にはほかの人の罪を正してあげるようなことはできないと考えてしまったり、争いに巻き込まれたいくないといった思いによって、とりあえず問題を先送りにしようと考えてしまったり、私たちはそんな弱さを抱えていたりするのです。愛をもって真理を語ることによって成長していく、確かに難しいことです。だからこそ三つのことをよく覚えておいてください。

①それは神様から与えられた責任

一つ目は間違っていることに対して、愛をもって真理を語るということは神様から与えられた責任だということです。私たちがするかしないかを選択できるようなものではないのです。なぜならきょうのメッセージの初めにも見ましたが、パウロはすべてのクリスチャンが愛をもって真理を語り成長していくと言っていました。つまり成長を目指していこうとする私たちひとりひとりにとって、愛をもって真理を語るということは絶対に欠かすことができないものだということです。確かに私たちにあって人の罪を指摘することは心が重たく感じてしまう、難しいことかもしれませんが、でもみことばはそれを私たちに求めているということです。しかし同時に、みことばが私たちにこれをしなさいと教えているということは、それが私たちにあって可能だということです。神様は私たちに不可能なことを求めているわけではありません。私たちがそれを行うことができる者へと造り変えられているからこそ、その力や助けが与えられているからこそ、神様は私たちにそれを求めているのです。だからもしだれかが正しい道から外れて、さまよっているのを見かけたとすれば、私たちはまず自分の心をよく吟味して、その上で勇気を持ってその人のところに行って、二人だけのところで真理を伝えてあげることです。しかし、こうして愛をもって真理を語る、罪を指摘するというのは、単に罪を指摘して後は自分で解決してくださいねということではありません。愛をもって真理を語るというのは、その人物と一緒にみことばを見て、ともに祈りながら歩いていくということです。罪を指摘してその人が罪を悔い改め、主に喜ば

れる成長した者になっていくことができるように、愛する兄弟姉妹たちが主のもとへと立ち返ることができるようにと助けを与え続けることです。私たちはその責任があるのです。

②それは素直に受け入れるべきこと

二つ目に言えることは、もし自分自身がだれかから自分自身の間違いや過ちに対してみことばに基づいて指摘を受けたのだとすれば、その指摘を素直に受け入れることです。私たちもよく知っていますが、残念ながら私たちの罪の性質というものはその指摘を拒もうとします。前回も見ましたけれども、子どもというのは教えられたり訓練されたりすることを望まないのです。ましてや自分が間違っているといったことばはだれも聞きたいと思いません。私たちは自分のうちに持っているプライドによって、そういった指摘を聞くことがなかつたりします。しかし、もしだれかがそのようにやって来たのだとすれば、その時によく考えてみることです。そうやって罪を指摘するというのは、ひとりひとりにとって難しく感じてしまうものです。でもその人は皆さんのことを愛しているから、皆さんが成長してほしいと願っているから、率先して皆さんの元にやって来て正直に話してくれているのです。その人は皆さんに愛を示そうと、それを実践しようとしているということです。だとすれば、私たちはそういったアドバイスや指摘に対してへりくだって、その人が語ろうとしているみことばからのアドバイスに、教えに耳を傾けることです。

③それは神の家族に与えられた特権

そして最後三つ目に言えることは、愛をもって真理を語るということは神の家族に与えられた特権だということです。罪を指摘するとか、だれかの罪を正すといったことばを聞くと、私たちは重荷のように感じてしまいます。でも、みことばにはそれは重荷ではなく、私たちに与えられた特権なのだがあります。なぜそれが特権かわかりますか？それは私たちがみんな今同じ目標を目指している者だからです。私たちはおのおの勝手なゴールを目指して生きているのではなく、みんながかしらであるキリストに似た者になっていくことを望んで生きているのです。ヨハネもⅠヨハネ3：2-3で「愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現われたなら、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。」と言っていました。同じ主によって救われて、同じ主を愛している私たちは、キリストに似た者になっていくことを願って今を生き、そして同じ希望を持って日々主の前を生きているからこそ、清くなることを追い求めているのです。それはもちろんパウロも例外ではありませんでした。だからこそパウロはきょうのテキストの中で、「私たちがもはや、子どもで」いるのではなくて、「むしろ、愛をもって真理を語り、あらゆる点において成長し、」と言っていました。パウロも成長することを願っていたのです。そして特に「あらゆる点において成長」していくことを願っていました。つまり私たちのうちの一部分だけが成長し、ある部分は成長しないということをおぼえているのではないということです。私たちは一部分だけが成長したから満足ですとするのではなく、あらゆる面において、すべての面においてキリストに似た者になっていくことを目指して生きているのです。

皆さんはどうですか？自分自身を見る時に、自分自身の弱さや成長しなければいけない部分をすべて見られていますか？多くの場合、自分の周りには自分には見えていなかった部分を教えてくれたりします。だからこそあらゆる点においてキリストに似た者に成長していこう、すべての面においてキリストに似た者になろうとするのであれば、私たちは周りにいてくれる兄弟姉妹によって教えられていく必要があるのです。私たちが目標を目指していこうとするのであれば、まだ完全ではない自分の足りない部分をみことばから愛をもって互いに指摘し合うことができる存在、そんな兄弟姉妹が絶対に欠かすことができないということです。そういった兄弟姉妹とともに成長し、目標を目指していくのだと。

教会というのはそういう場所だということです。これが神の家族とされた者たちに与えられている特権であり、また生き方なのだということです。パウロはこのエペソ4章を通して、ひたすら教会を建て上げる方法について教えてきました。教会を建て上げていくのであれば、教会として成長して行くのであれば、私たちは互いに愛をもって真理を語っていく必要があります。それができるのは同じ神の家族だけです。私たちは同じ主によって、同じ福音によって今一つのものとなされました。かつては主に逆らってバラバラに歩んでいた者たちが同じ主の愛を知ったのです。あの十字架の上で示された主の犠牲的な愛やその赦しを私たちは知りました。だとすれば、この主が示してくださったその同じ愛のうちに、私たちは互いの間で真理していくことです。互いにいつも犠牲をもって仕え合い、そして祈り、励まし合っていくことです。互いの成長になることを、徳と益となることを求めて、互い間で語っていくこと

です。もしだれかが霊的に落ち込んでいるのを見かけたのだとすれば、その人に手を差し伸べて、みことばの中に平安や希望を見出すことができるように、そのことを側に立って一緒に歩むことで助けてあげることです。またもしだれかが真理から外れて迷い出ているのだとすれば、愛と忍耐をもって過ちを指摘し、一緒にキリストに似た者に成長していこうとともに目指していくことです。そういった歩みこそが神の家族として生きる私たちに与えられた特権であり、私たちにはそれができるのだと。愛のうちに真理を堅く保って成長すること、これが目標を目指して教会が成長する上で私たちが注意すべき二つ目の点だったのです。

○まとめ

さて、今朝私たちは15節のみことばからキリストが持つておられる教会の完成図へと近づいていくために、具体的に何をすべきなのかということの五つある中の二つを見ました。私たちは子どものままでいるのではなく、愛のうちに真理を堅く保ち、キリストに似た者へと成長していくことが求められていました。皆さんのうちにはパウロが持っていたような、キリストのことをもっと知りたい、この方に似た者になっていきたいといった願いが日に日に増し加えられているのでしょうか？それともまるで自分にはもう成長することがないかのような、そんな歩みをしているのでしょうか？かつてどうだったかではありません。今をどれだけ熱心に自分の成長に必要なみことばの乳を学んでいるのでしょうか？みことばによって成長しているのでしょうか？そして何よりいろいろなものに揺り動かされてしまうのではなく、学んだみことばの真理に根ざして、その真理を実践しているのでしょうか？ただ知識として蓄えるのでもなく、行動の伴わない口だけのものではなく、愛をもって互いの中で真理をしているのでしょうか？考えれば考えるほど、私たちにはまだまだ成長するところがありますよね？あれほど熱心にキリストを追い求めて生きていたパウロは、最期にⅡテモテ4：6-8で「私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来ました。私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」と言っていました。私たちが持っている願いも、目標も、パウロと同じです。この願いを持ってきょうを生きていくことです。主にお会いするその日を楽しみにしながら愛のうちに真理を堅く保って成長していくことです。キリストが持つておられるこの目標に到達することができるように、続けてともにみことばを学び、互いに助け合いながら主に喜ばれる成熟した者として歩んでいきましょう。